

スペイン
バリャドリード大学
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部
国際言語文化学科 3年 ヨーロッパ研究コース



スペインのバリャドリード大学で過ごした約 5 ヶ月を振り返ってみると自分自身はとても成長して、それでもまだ伸びしろがあることがわかった。スペインという日本から向かうには 1 日かかる異国の地で生活をした体験は時と金を超えた貴重なものであり、私にとっての見える人生の財産になったのは間違いない。この私にとっての財産を学校生活、日常生活、スペイン留学を通して、この 3 つのトピックに分けて報告する。

まず学校生活について述べる。私の通った大学はバリャドリード大学である。4 つのキャンパスがあり、その中でも私はセゴビアキャンパスに通った。とても歴史のある大学だが、セゴビアキャンパスは比較的新しく、歩いてユネスコの世界遺産である水道橋、セゴビア大聖堂、アルカサルに行くことができる。このような充実した環境で勉学に励めたことをとても光栄に思う。私は社会科学・司法・コミュニケーション科学学部観光学科に所属し、授業は「企業管理と人事管理」、「観光統計」の 2 つを受講した。「企業管理と人事管理」では企業を始めるために必要なこと、大切なこと、そしてどのように雇用するのかを学び、分析し解説をして、「観光統計」ではエクセルや SPSS といった統計アプリを使って観光データを用いて分析解説をした。これらの授業ではスペイン語を用いて授業が行われ、言語能力だけでなく、スペインやヨーロッパの視点から見る授業が行われることで、日本では学べない知識を得た。さらに県立大学と同じく少人数授業であったため、先生と生徒の距離がとても近かった。生徒たちは積極的に先生に疑問を投げかけ、先生はそれに答えていた。自分からわからないことを先生と他の受講生に聞くことで先生は解説をしてくれて、また他の受講生は勉強会に誘ってくれた。私自身、先生と他の受講生とコミュニケーションを取ることが授業の理解度を深めるために必要不可欠であったと思う。このように授業を通して学んだことは言語能力だけでなく、生きた知識そして生きる術もまたそうである。他にも大学が主催するイベントでロッククライミングに挑戦したり、異文化交流会では各国の料理を振る舞ったりした。



次に日常生活について、私は2人のスペイン人女性とルームシェアをした。2人はセゴビアやマドリードを案内してくれるだけでなく、スペインでは日常的にどのようなものを食べているのか、思想を持っているのか、行動をするのかを教えてくれた。他にも授業の予習復習をする際に先生が書いた文字で読めないところや理解できない授業の内容や、料理のレシピなどをスペイン語でわかりやすく意味を教えてくれた。日本にも興味を持ってくれたので情報交換をしたりもした。もちろん一緒に住んでる上でお互い不満を持つことがあったが、その時はちゃんと話し合い、解決案を考えた。日本にいたときは自分の意見を主張するのが得意ではなかったため、ちゃんと気持ちを伝える力は自分だけでなく相手を守る力でもあることを身にしみて感じた。家族以外の人と、ましてや多国籍の人と共存するためには、お互いの理解が必要であることがわかった。これは視野を広くしても言うことで、今後のグローバル社会においても大事である。



最後にスペイン留学を通して、私はスペイン語という手段を使って、スペインでしか味わえない体験、知識、思想、文化を知ることができた。単純にいうととても楽しかったし、これこそかけがえない思い出である。さらに自分の家族を知る機会にもなったと思う。私は今まで母方の家族に会ったことがなかった。なぜなら日本には家族がいなかったからだ。しかしスペインにはマドリードとバルセロナに母方の家族がいたため、私は訪れ、そこでどのような成り行きでペルーからマドリード、バルセロナに住むことになったのか、母とはどういった関係であるのか、そして自分の家族の歴史についてご飯を食べながらお話をした。その時間は「両親」を知ること、すなわち「自分」を考えさせられる時間でもあった。この経験は私にとっては日本では味わえない経験であり、私を手厚く支援してくれたスペインの家族はもちろん、その機会を設けてくれた日本にいる私の家族にも感謝している。留学生や私をサポートしてくれるメンターらは私のことを「segunda familia」(第二の家族)とってくれた。私も心からそう思う。

このようにスペインで過ごした約5ヶ月は私にとっては見えない人生の財産であり、これからも私の中で生きていく。このような貴重な体験をさせてくれた大学、家族、友人に心から感謝をしたい。私はこれから得たものをさらに強化し、これからも勉学に勤しみ続け、将来的に多文化共生の支援をしていきたい。

バリャドリード大学
交換留学報告書

静岡県立大学

国際関係学部

国際言語文化学科 4年

ヨーロッパ研究

2022年2月から7月までの期間、私は静岡県立大学の交換留学制度を利用して、バリャドリード大学セゴビア・キャンパスで学んだ。2020年に新型コロナウイルスが引き起こしたコロナ禍が始まり、バリャドリード大学への交換留学の募集が中止されてから初めての募集であった。例年とは異なる環境下でのセゴビアの私の学生生活や普段の生活を報告する。

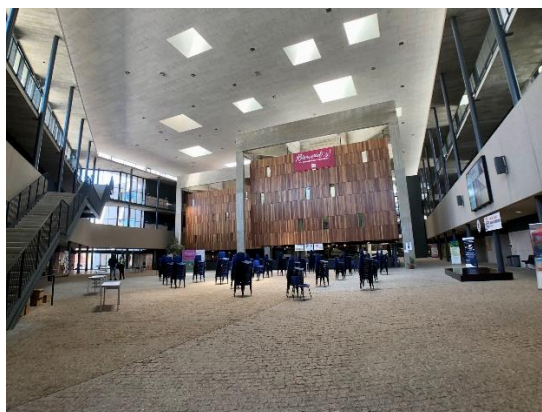
セゴビアはカスティーリャ・イ・レオン自治州内にあり、同州州都バリャドリードとスペインの首都マドリードの間に位置する比較的小さな街である。およそ1900年前に建設された、高さ約30mのローマの水道橋(Acueducto)や、セゴビア大聖堂がある開放的なマヨール広場(Plaza Mayor)とディズニーの『白雪姫』に登場する城のモデルになったアルカサル城(Alcázar)などを有する旧市街地は世界文化遺産に登録されている。マドリードからは高速バスで1時間半、新幹線で約30分で行くことができ、週末は日帰り旅行を楽しむ観光客であふれる場所である。セゴビアは標高が1,000mほどあるため、気温は冷涼で夏でも涼しい避暑地であり、中心地から車で十数分の距離にラ・グランハ宮殿(Palacio Real de La Granja de San Ildefonso)やリオフリオ宮殿(Palacio Real de Riofrío)などがある。しかし、北アフリカから到来する熱波の影響で最高気温が35度以上になる日が続くこともある。

バリャドリード大学での授業について述べる。バリャドリード大学では、社会科学・司法・コミュニケーション科学部観光学部に所属した。授業は「観光統計(Estadística Aplicada al Turismo)」と「第二外国語Ⅰ：フランス語(Segunda Lengua Extranjera I: Francés)」を履修した。2科目のみの履修だが、1週間に2コマあるため、週に4コマの授業を受けた。私がバリャドリード大学で授業を受けた学期は、日本でいう後期に当たる。(スペインでは9月に前期が開始する。)

「観光統計」の授業では、エクセルやSPSSを使い、データの算出方法や算出したデータの分析を学んだ。スペイン国立統計局(Instituto Nacional de Estadística)の統計データを用いて、観光客数の移行の分析や予測、また給与データの分散や平均値、中央値などを、数式とこれらのソフトを用いて算出する内容だった。今まで日本語でも聞いたことがないような専門用語が頻出し、筆記試験においては、算出した内容について説明を求められた。また上記のソフトをスペイン語で操作しなければならないことも、個人的に授業の難しさを感じる理由の1つだった。しかし、定期テストや期末テストの日が近づくと、先生方は授業時間外にもかかわらず遠隔で補習授業を設けてくださり、テストの出題範囲について「○○があまりできていないから、○○を勉強したほうがいい」とアドバイスをいただく事もあった。プレゼンテーション等はなかったが、細やかな指導を受けることができ、充実した授業だった。

「第二外国語Ⅰ：フランス語」の授業では、ヨーロッパ言語共通参照枠のA1からA2.1レベルのフランス語が教えられ、フランス語のアルファベットから直説法現在の動詞の活用、10万までの数詞が扱われた。文法の内容自体は難しいものではなかったが、覚えるべき語彙数が多く、期末試験の他に口頭テストが数回あり、その上抜き打ちであったため、全

く拙いフランス語で答えてしまった時はひどく落胆した。フランス語はスペイン語と同じルーツ(俗ラテン語)を持つロマンス諸語の 1 言語であるため、フランス語を学習していると、語彙の点でスペイン語と類似することが多くあった。受講生のほとんどがスペイン語母語話者だったのだが、彼らの中には容易に口頭テストをクリアする人が多くいた。言語の習得は母語にも左右されるものだと強く感じた。



(バリャドリード大学セゴビア・キャンパス内)

次に、普段の生活について述べる。私はシェアアパートで暮らし、赤道ギニア人 2 人と生活した。2 人はバリャドリード大学の正規留学生で、小さい頃から一緒に学生生活を過ごした幼馴染だという。休日は彼らと映画を観に行ったり、テレビゲームをして余暇を過ごした。彼らに料理を振舞うこともあったが、自分用に調理してキッチンに置いていたものが食べられていることもあった。共同生活するということは、共同スペース内にあるものが共有されることでもあるのだと実感した。また、2 人はスペイン語が母語で、会話の途中で私が文法的な間違いをした時に都度直してくれたり、わからない語彙があったらその意味を教えてくれるだけでなく、その類義語もいくつか教えてくれたりした。この 2 人と一緒に暮らしたことは、私のスペイン語能力の上達に大いに寄与したと思う。

この留學生活で、エラスムス留學生の友人や、アメリカ大陸からスペインにきた留學生の友人をつくることができた。バリャドリード大学の Erasmus Student Network (以下 ESN) が定期的に現地の学生や留學生同士の交流をはかる目的で交流会を開催するため、積極的に参加して、学生たちと交流ができるよう努めた。そうすると、すぐに学生たちと仲良くなることができた。彼らとは、授業後に大学近くのスペイン・バルに集って話をしたり、週末はマドリードをはじめ、スペインの各都市を一緒にまわったりした。スペインでの学生生活を充実したものにするきっかけを設けてくれた ESN には感謝したい。

スペインにおける新型コロナウイルス感染症と人々の生活について述べる。屋内でのマスクの着用義務や、アルコールでの手指消毒は日本と変わらない様子だったが、街中でマスクを着用する人はそのほとんどが高齢者で、その他の年齢層の人たちは外ではマスクを着

用していなかった。2022年4月20日、スペイン政府が医療機関や公共交通機関を除く屋内でのマスク着用義務を撤回すると、高齢者以外でマスクを着用する人はほとんど見られなくなった。この2年間、マスクをしているのが当たり前で、2020年よりも前からマスクをするのが珍しくない地域に住んでいた私は、こういった「マスク文化」は東アジアによくみられる習慣なのかもしれないと思った(手指消毒は依然として奨励されていた)。また、4月20日以降の授業は、それまで行われていた遠隔授業は行われなくなり、対面授業のみになった。

それから、日々の生活の中でキリスト教の存在を意識することがよくあった。スーパーマーケットは毎週日曜日に閉店し、昼間家の中にも教会の鐘が30分ごとに鳴る音が聞こえてきた。特にその存在を意識したのは、4月に2週間ほどあった「聖週間」である。ナツメヤシの葉を持った人々が歌いながら道路を練り歩いている様子や、聖週間の最後にはイエス様の像を担ぎながら水道橋の前を歩く人々を見ることができた。この期間は大学の授業がないため、学生たちの中には国内外で旅行を楽しむ者もいた。キリスト教圏で生活したことのない私には、非常に新鮮なものに映った。



(水道橋とオリエンタル広場)



(アルカサル城)

スペインでの滞在中にトラブルに遭ったこともあった。スペイン入国初日にパスポートをバラハス空港の中で紛失してしまったことだ。バラハス空港の紛失物オフィスに連絡をとると「空港内の警察署にある」と返事があったため、急いでセゴビアから空港まで戻り、警察署を訪れた。しかし、「ここにパスポートはないから、日本国大使館と連絡をとるように」と言われ、大使館と連絡を取り、その後警察署でパスポートの紛失届を発行してもらった。結果的に、大使館から、空港の警察署からパスポートが届いたという連絡があったため、現地でパスポートの再発行をせずに済んだ。入国して間もなく、1人で、警察署や空港で上のことを説明しなければいけないのは勇気が要ったが、「自分が必要としていることを相手に伝えること」というのは、その後の滞在においても必要なことであつたし、滞在の初期段階でそれが出来たことは私にとって大きな自信になった。

最後に、コロナ禍にもかかわらず、バリャドリッド大学に交換留学させてくださった静岡

県立大学、受け入れ先のバリャドリード大学、それから渡航を許可してくれた家族に深謝申し上げます。私の学生生活の中で最も大きな決断であり、そのリターンも大きなものであったと思う。初めて暮らす土地で母語以外のことばを話さなければならない環境下で、自分がどう行動すべきか、どのように判断すべきかといった能力は、この経験を通して更に向上したと実感する。そして、この経験で得たことを私の今後の人生で活かすことができたらと思う。



(ラ・グランハ宮殿庭園)



(セルバンテス像(バリャドリード))